（別紙4）　　平成　28　年度

1　自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	0992500058		
法人名	医療法人社団　湘風会		
事業所名	グループホームアベーテ		
所在地	栃木県那須郡那珂川町馬頭2050－1		
自己評価作成日	平成28年10月17日	評価結果市町村受理日	平成29年1月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http:://www.kaigokensaku.jp/09/inndex.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118－189
訪問調査日	平成28年11月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」一人一人のその人らしさを大切にした生活支援に努めます、という理念の下で取り組んでおります。家庭的な雰囲気で生活できるように、入居者さまに寄り添い一緒に家事やレクリエーション、外出などを行っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

事業所は閑静な住宅街にあり、隣には梅林、すぐ後ろは雑木林の山で四季折々の季節感にあふれている。小規模多機能型居宅介護事業所を併設した建物は、中庭を中心に食堂や居室が配置されている。リビングは、天窓や中庭に面したサッシ戸から陽光が差し込み、明るい内装と相まって明るく清潔感を感じさせる空間となっている。テレビを囲むソファーには利用者の明るい笑顔がみられ、運営推進会議に利用者が交替で参加し自己紹介をしてもらっており、日用品の買い物に職員と一緒に出かけたりするなど、利用者一人ひとりが楽しく快適に過ごしている。重度化や終末期の対応についても、利用者や家族の意向をくみ取り、できるだけ事業所での生活が継続できるようにしている。かかりつけ医に往診に来てもらっている利用者もいて、医師の往診、看護師との連携、家族の協力により看取りを行った事例もある。管理者と職員の関係も良好で、意見が出しやすく、明るく開放的な職場の雰囲気が、利用者への良いケアにつながっている。今後も、利用者や家族の意向を尊重し、一人ひとりに寄り添ったケアの実践に引き続き取り組んで行くことを期待したい。

Ｖ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）	○	1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）		1. 毎日ある
		○	2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
		○	2. 数日に1回程度
			3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月の定例会や朝夕の申し送りの時に、理念が実践されているか確認している。	「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」という法人の理念を基本に、利用者一人ひとりがどのように一日を過ごし、楽しむことができるかを常に考えている。利用者の希望で、庭先で野菜や米を栽培し収穫を行っているが、そうした楽しみ、喜びを共有するとき、職員は理念が実践されていることを感じている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	職員と一緒に近くのスーパーや薬局に買い物に行ったり、散歩に出かけたり、施設に紙芝居・ハーモニカのボランティアを招いたり、施設主催のお祭りに地域住民を招いたりしている。	七夕会には、近所の高齢者との交流を兼ねたカフェを開き、近隣住民が来所している。地域のお店での買い物や近くを散歩するなど地域との繋がりを続けている。紙芝居、ハーモニカ、舞踊など、ボランティアが定着し、定期的に訪れている。地元の飲食組合によるラーメン慰問や、秋祭りのそば打ち会なども行われ、年々地域に馴染んできていることを実感している。	保育園や学校を訪問し、子供たちと交流を図りたいという思いはあるが、まだ実現していない。そうした取り組みが利用者のさらなる喜びにつながっていくことを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	まず入居者の家族に認知症の理解や支援の方法を学んでいただく機会を作りたいと考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	町担当職員・地域包括支援センター職員・民生委員・家族・入居者が参加している。参加者から地域の情報を得たり、施設生活に対する感想を聞いたりして、外出や生活支援の計画に生かしている。	年6回開催の運営推進会議には、町の担当職員・地域包括支援センター職員・区長・民生委員・家族・利用者が参加している。参加者からの発言は、介護に関する質問や施設への感想などが多く、地域の人が介護に関して、プロのアドバイスを聞くことができる場となっている。民生委員からは出かけるのに適した場所の情報が提供されるなど、施設側にも参加者にとっても有意義な内容となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	主に町担当者への、事業所の実績やケアサービスの取り組みなどの報告は、運営推進会議で行っている。	町の担当職員や地域包括職員とは、常に連絡を取り合い、事故事例や困難事例等も相談しやすい関係を築いている。町からの要請を受け要援護者受け入れ施設となっていて、実際に空室を利用し、町の担当職員と連携して、要援護者を緊急保護した実績がある。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関扉と玄関に続く通路の扉は日中は鍵をかけないが、各居室のサッシは日中でもなるべく鍵をかけるようにしている。。入居者への声かけで入居者の行動を抑制しすぎないように配慮している。拘束禁止についてのマニュアルは作成済みで勉強会で職員に周知している。	身体拘束防止マニュアルがあり、職員は法人内研修や併設施設と合同の勉強会等で身体拘束をしないケアについて学んでいる。毎日の生活の中で、職員は利用者の思いをくみ取り、行動を理解し、寄り添うことで拘束を必要としないケアに努めている。ベッドから落ちる心配のある人には、低床ベッドを使うなどの工夫もしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	合同研修で学んだことを実践に結び付けて、虐待が起こらないように注意をして支援をしていっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	合同研修会で勉強はしたが、全ての職員に周知できるように再度勉強会を持つ機会を作るようにしていく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書の内容は管理者が家族・本人に疑問の有無を確認しながら説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者からはまめに要望を確認している。家族からは面会時に要望を確認している。	家族からは、月一回の利用料等の支払いに来る際に、要望を口頭で伝えてもらっている。利用者からは寿司や刺身を食べたい等の食に関しての要望があり、出前を取ったり、外食をしたりして希望を叶えている。野外コンサートに行きたいという希望を知って、職員が付き添い実現させた事例もある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員からの運営に関する提案は、主に定例会で受け付けている。	月一回の定例会でイベントや研修、施設の改善すべき点について話し合いが行われている。管理者が職員の意見を丁寧に聞くことで信頼関係が育まれ、職員はのびのびと自分の意見を述べることが出来ている。手すりが必要などの改善提案は、時間がかかっても叶えるよう努力している。話し合われた内容は、議事録を作り回覧し、参加できなかった職員と情報を共有できるよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設長は職員個々の要望を確認してできる限り職場環境・条件が整備されるように努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に地域ネットワーク会議・ケアマネ連絡会議の中での勉強会や、事業所内研修に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	合同研修会などに参加をして交流を深めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と繰り返して話すことでなじみの関係を作り本人の意向が聴けるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人同様、家族とも繰り返して話すことで馴染みの関係を作り、家族の意向が聴けるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族の意向をよく確認したうえで、必要な支援を見極めるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は入居者の能力に応じて掃除や洗い物等をしてもらうようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には面会に来てもらったり、自宅への外出や外泊、病院受診に連れていってもらい、関係の継続をしてもらうように努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	お盆やお正月には家族にお願いをして自宅に外出・外泊してもらったり、馴染みの面会者が来た時にはゆっくり落ち着いて話せるように配慮したりしている。	利用者の地域社会との関係性については、入居前のアセスメントや、入居後の家族や本人からの聞き取りで把握している。正月やお盆、墓参りなどには、家族の協力を得て外泊している人が2、3名いる。面会者が来たときは、ゆっくり話せるよう居室や相談室を利用してもらい、居室には椅子を用意するなどの配慮をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲の良い入居者達は近くに座って談笑したり食事をしてもらったりして、意思疎通が難しい入居者には孤立しないように職員が近くに座って触れ合ったりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も本人・家族から相談があれば応じている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分から意見を述べる入居者は少ないので職員が日常の関わりの中で声をかけてできるだけ本人の意向をくみ取るように努めている。確認が難しい時は家族に移行を確認したりして本人本位に検討している。	家族や関係者からの情報を参考に、声かけや過去の話を傾聴することで、利用者の思いや意向をくみ取るよう努めている。職員は業務日誌や申し送りで利用者それぞれの情報を共有している。折り紙がしたいという意向を受け、職員が一緒に文房具店へ行って材料を買ったり、好きな服を家から持ってきてほしいという思いを家族に伝えて、届けてもらったりなどの事例がある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に本人・家族・担当ケアマネから生活歴やサービス利用経過を確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	施設での生活の様子を職員が観察して記録することで、職員が情報を共有している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	まずは本人・家族・職員と協力してアセスメントを行い課題を把握したうえで、目標とサービス内容を考える。次にこの介護計画原案をサービス担当者会議で検討して介護計画を作る。	利用開始時や面会時に家族等から聞き取った情報や、サービス担当者会議等で職員から出た意見を参考に、計画作成担当者が介護計画を作成している。モニタリングを半年毎に行い、状況に応じて半年毎に介護計画を見直している。車椅子の人が歩行運動により、シルバーカーを使って歩けるようになった、風呂嫌いの人にうまく声をかけ、入ってもらえるようになったなどの事例がある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケア内容などは個別記録に記入して、職員はその記録を随時確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	紙芝居・ハーモニカ・ヘアーカットなどののボランティアを招いている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	時々職員が付き添って、近くのスーパーの買い物に行ったり自然観察に出かけたりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかり付け医受診は基本的には家族が対応するが、家族が対応できない時・緊急時は管理者やケアマネ・併設の看護職員が対応する。	かかりつけ医の受診は原則として家族が対応している。日常生活の状況は文書で渡しているが、病状によっては看護記録を渡すこともある。家族が付き添えない時や医師に状況説明が必要なときには管理者やケアマネージャー、併設施設の看護師が同行している。かかりつけ医の中には月一回往診に来てくれる医師もいる。受診結果、服薬等に関しては、家族又は同行職員からの情報を業務日誌等で伝え、職員間で情報を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は入居者の変化を速やかに看護職員に報告をして相談したり指示を受けたりしている。家族が病院受診に付き添えない時は主に看護職またはケアマネが付き添う。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院に対して必要な情報提供をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に本人や家族には重度化した場合は他の施設や病院に移ってもらうことがあると説明している。特に高齢の場合は家族から延命の希望を確認して終末期の対応を職員間で話し合って慌てずに対応するように準備している。	契約時に、医療的措置が必要となり施設では対応できなくなった場合など重度化した場合には、他の施設や病院に移ってもらうことがあると家族に説明している。状況の変化に応じて、重度化した場合の対応等を家族と話し合っている。家族の要望により、医師の往診、看護師との連携、家族の協力のもと看取りを行った事例がある。今後も医療との連携や家族の協力など条件が整えば看取りを行っていくとしている。	今後も事業所での看取りを希望する家族が増えてくると思われることから、家族の協力、医療機関との連携、職員の研修など終末期に対応する体制を整え、利用者も家族も安心して最後まで託せる事業所として、これからも引き続き取り組んでほしい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	殆どの職員が消防職員による普通救急救命講習を受講して、その後も緊急時の対応の実習を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中・夜間それぞれの火災を想定した訓練を年に1回ずつ行っている。その時は消防職員が立ち会い、近隣住民にも協力してもらう。	消防署の職員の立ち会いのもと、昼間と夜間想定で年2回消防訓練を実施しており、訓練結果については消防署に報告している。避難訓練の際には、隣接の住民に利用者が避難した場合の見守りなどの協力をしてもらっている。緊急時の職員及び利用者家族への連絡体制が整備されており、スプリンクラーも設置済みである。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	介助しながらトイレや浴室の扉はきちんと閉めるように徹底している。入居者の個人情報を他の入居者の排泄の失敗や記憶の喪失に対して本人が気にしないようにさりげなく対応している。	プライバシー保護についてのマニュアルがあり、接遇の勉強会も行っている。トイレ誘導の際にはさりげない声かけをしたり、トイレや浴室の扉は必ず閉め、排泄の失敗などもプライドを傷つけないよう支援するなど利用者の気持ちに添った介助を心掛けている。利用者の個人情報については、ほかの利用者に知られないよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	何がしたいと本人から言うことが少ないので、職員から声掛けしてできるだけ希望どうりになるように支援をしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴したいとかみんなで一緒にやりたいとかの希望にこたえられるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝や入浴後に顔を拭いたり髪をとかしたり、その日の気分で気に入った服に着替えられるように支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	業者から調理済みの食事を提供している。献立を確認して嫌いな食べ物は別の物に変更できるようにしている。食後は自分でできる入居者には片付けや食器洗い、食器拭きをしてもらっている。	食事は配食業者に外注しているが、ご飯や味噌汁等は事業所で用意しおり、おかずを1、2品加えたりもしている。おやつは職員の手作り品を出している。食器洗いや食器拭きを手伝う利用者もいる。お茶碗、はし、湯飲み等は各自好みの物を持ち込んでいる。年に3～4回の外出時に回転寿司など外食を楽しんでいる。業者が事業所に出向いて目の前で作ってくれるラーメンや手打ち蕎麦などを食べる楽しみもある。	食事は全て外注で、職員が1、2品加える等の工夫をしているが、今後も手作りメニューを増やすなど利用者の希望に添った支援ができるよう、引き続き努力を続けてほしい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分の量は摂取時に記録して不足することが無いように注意しているが、月に1度体重測定して体重が増えないようにコントロールしている。水分は入浴後・運動後・希望時に提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後に一人一人に口腔ケアを促して、状況に応じて義歯を洗ったりして清潔さを保っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表で一人一人の排泄パターンを確認して適時にトイレの声掛け・誘導を行っている。ズボンの上げ下げやお尻拭きをなるべく自分で行うように促して、できない時だけ介助している。又トイレの場所が分かりやすいように黄色の立体的な表示をトイレ入り口に取り付けてある。	トイレ誘導の際の声のかけ方や排泄失敗への対応の仕方などプライバシーや羞恥心に気をつけながら、排泄の自立に向けた支援を行っている。排泄チェック表で一人ひとりの排泄パターンを確認し、落ち着かないなど利用者の動作をみて適時声かけ誘導を行っている。便器の蓋を開けたり、ズボンの上げ下げなどが分からなくなっている利用者もいるが、可能な限りトイレでの排泄を促すような支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事は野菜を多めに提供し、水分はカルピスや牛乳などをまめに提供している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	主に午後の時間に3名くらいの入居者が入浴している。又適度な運動を促している。	浴室は、個人用の浴槽が一つあり、床暖房が設置されている。入浴は、週に2～3回で、午後の時間帯に入っている。一人ずつ必要な介助を受けながら入浴しており、機械浴が必要な場合には併設事業所の浴室を利用できる。入浴を拒否する利用者に対しても気分を変えるような声かけや翌日に再度促すなど、個々の利用者に寄り添った支援をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人がソファーやベッドでゆっくりと過ごしている。疲れていたり、休みたい時には無理には日中の活動には参加させないで休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人一人の薬については誤薬の無いようにカウンターに名前をつけ、その都度名前と薬が一致するように確認して服薬をしてもらっている。必ず薬は飲みこむまで確認している。症状に変化があった時には記録して看護師に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者の中には掃除や食事の後片付けを自分の仕事として毎日進んで行っている人がいる。お習字や折り紙細工に取り組んでいる人もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	時々職員と近くのスーパー・薬局まで食材・日用品・薬を買いに行っている。家族がイベントに連れて行ってくれている入居者もいる。また季節ごとに入居者全員で散歩や外食に出かけている。	職員と利用者が1対1で、近くのスーパーマーケットや薬局に、食材や歯磨き・目薬など日用品の買い物に出かけている。また、花見、紅葉狩りなど季節を感じる外出は全員で行っており、帰りに回転寿司等で外食を楽しんでいる。家族に連れられ、近くの美術館のイベントに行く利用者もいる。日常的な散歩として事業所の庭を歩いたり、近くの公園に行っている。	買い物や近くの公園等に出かけるなど外出の機会もあるが、可能な範囲で近隣の散歩など日常的な外出の機会を増やすよう引き続き努力してほしい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者全員小遣いは事務所に預けていて、入居者は職員と買い物に行く時などに職員が協力してお金を使う時がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者から要望があれば家族に電話したり、手紙のやりとりの支援を行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングは充分な日差しが入り職員と入居者が協力して作ったカレンダーや入居者書道作品が飾られソファーでゆったりと過ごす事ができる。食堂も明るく中庭の木々や青空を眺めながら食事をすることができる。廊下の壁には最近の行事の写真が貼られている。	食堂を兼ねたリビングの天井は高く、高窓からの光が入り、窓やサッシ戸も開口部が広く、室内は明るい空間となっている。利用者はテレビを囲むように置かれたソファーに座り、テレビ番組を見たり会話を楽しんだりしている。食堂には対面式のキッチンがあり、家庭的な雰囲気の中で落ち着いて食事を取ることができる。季節を感じさせる飾り付けがされ、行事の写真や習字など利用者の作品が数多く飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事席やリビングの座席は気の合う入居者同士で座っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室入口に職員手作りの人形の目印がつけられ部屋が区別しやすくなっている。ベッドやタンスは入居者の馴染みの物が入居者が使いやすい位置に置かれている。壁にはカレンダーやぬり絵などの自分の作品がはられ、観葉植物や植木を育てている入居者もいる。	居室には花の名前がつけられており、入口には利用者が部屋を間違わないように、部屋毎に異なった人形等の飾り付けをしている。室内には、ベッドやタンス、テレビなど利用者が持ち込んだなじみの家具が置かれている。壁にカレンダーや塗り絵など自分の作品を飾ったり、観葉植物を育てているなど、それぞれが居心地よい空間を作り暮らしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレの入り口に目印を付けてわかりやすくしてある。廊下・トイレ・浴室になどには手摺がつけられ、台所カウンターの角などにはクッションを付けて怪我をしないようにしている。		